

# 海外生活 エッセー

パリ事務所

## 土葬？火葬？パリの墓地を訪ねて ～コロナ禍で変わるフランス葬儀事情～

(一財)自治体国際化協会パリ事務所 所長補佐 早坂 諒 (市川市派遣)

### → 変わりゆく死生観とパリ市が抱える 墓地問題

先日、ショパンやドラクロワといった多くの著名人が眠ることで有名なパリ市内のペール・ラシェーズ市営墓地を訪れる機会がありました。

フランスでは、もともと終末での死者の復活が教義であるカトリック教徒が多いことから、土葬が主流で火葬はタブーとされていました。しかし1963年にローマ法王庁が火葬を認めて以来、徐々に状況が変わってきています。パリでは墓地用地の不足に加え、市内墓地の永代使用権が非常に高額で富裕層しか手を出せないことから、カトリック教徒の中でも火葬してより低廉な納骨堂への安置を選ぶ人々が増えてきています。また、無宗教者の増加も相まって、火葬率は全国で1973年の0.4%から2014年には37%、パリはすでに約半数を超えていると見られています。

この墓地には土葬の墓に加え、火葬場や納骨堂もあります。納骨堂は、火葬場を囲む建物と地下の2か所にあ



ペール・ラシェーズ墓地の火葬場



納骨堂には多くの故人が眠る

り、壁面沿いの区画に納骨され、故人の氏名と生没年が刻まれたプレートが設置されています。納骨区画は4万を超えるものの、すでに壁面の9割以上が埋まっており空きはごく僅かでした。納骨堂の拡充は困難と言われている中、埋葬を所管する自治体としてパリ市は今後、難しい対応を迫られることとなります。

### → コロナ禍での新しい葬儀の形

葬儀事情は、新型コロナウイルスの流行からも大きな影響を受けました。2020年3月のロックダウン以降、何度か状況は変化しましたが、現在は2020年12月2日のデクレ（政令）により、葬儀に関しては参列者の並びを2列から1列に制限し、座席間の距離確保などの対策をとったうえで、教会での葬儀には人数制限なし、墓地での埋葬には30人以内の出席が認められています。なお、お墓参りについては、社会的距離の確保、手洗いとマスク着用といった通常の予防行動は必須のうえ、じょうろやブラシなど掃除用具は各自で持参して持ち帰る必要があります。葬儀の適切な実施のため、一時的に墓地への出入りが制限される場合もあるようです。また、コロナ感染による死者とのお別れにも規制があり、2021年1月21日のデクレにより、亡くなった場所に限り、防護服を着用した家族や親族のみ故人と対面することができず、顔や身体に触れることはできず、また、家族などとの対面後は棺を密封するため、葬儀参列者が故人の顔を見ることはできません。

このような制限がある中で、オンライン葬儀サービスが導入されています。パリ市内の葬儀社メゾン・クリデルは、棺の前にスマートフォンとマイクを置いてお葬儀の様子を撮影し、ウェブライブ配信サービスを専用サイトで提供しています。参列者は家族の希望に応じて設定され、インターネットからの簡単なアクセスにより、葬儀へのリモート参加を可能にしています。今後もこのようなサービスのさらなる充実に向けて、葬儀業界ではデジタルツールの開発などが期待されています。

普段あまり接点のないフランスの葬儀事情ですが、墓地問題やコロナ禍の影響など、日本と共通の悩みがあることを垣間見ることができました。